

# 日本人が好む英語学習方略

## —高橋五郎著「最新英語教習法」を読む—

多田洋子

### 初めに

高橋五郎は、明治中期から大正初期にかけて多くの著作を残した翻訳家・評論家である。卓越した語学力を持っていた高橋五郎は、英語教育に関しても多くの著書を残したが、その中の1冊に『最新英語教習法』がある。この本には英語の学習法が書かれているが、その中には現代に通じるものも少なくない。過去と現在に共通する学習法があるとすれば、それは日本人が好む学習法、あるいは日本人が効果的だと思っている学習法であると言えないだろうか。加えて、過去の学習法と他の文化圏における学習方略研究を検討することにより、日本人が好む学習法を考察する。

### 1 高橋五郎の略歴と『最新英語教習法』

高橋五郎（安政3～昭和10）に関する資料は、少ない。以下は、飛田（1968）の調査をまとめたものである。高橋は安政3年、新潟県に生まれた。14歳の時から高崎市で漢学を学び始め、その後4箇所で神典・漢籍・仏典・皇学を学んだ。明治8年より横浜でブラウン博士に日本語を教えると共に、博士から英語・ドイツ語・フランス語・ギリシャ語・ラテン語などを学び、新約聖書の和訳に取り掛かる。明治15年からは、ヘボン辞書の改訂にも関わっている。明治20年に聖書の翻訳が完成したと同時に東京に移り、神田英学館の教頭として英語を教えるようになる。その後、早稲田専門学校を初めとして、中学（神田国民英学会、麻布英和学校、築地立教中学、芝新銭座攻玉社中学、神田錦城中学）や大学（中央大学、駒沢大学）で英文学および英語を教えた。その間多くの著書を残したが、その内容は英語教育にとどまらず、辞書編纂・翻訳・評論など多岐にわたる。

高橋五郎を研究対象にした理由は、外国留学の経験がなく、かつ大人になってから（19歳）英語を学び始めたにもかかわらず、高度な英語力を習得した点にある。『最新英語教習法』は明治36年に書かれた、362頁19章からなる本である。具体的な教授法と学習法について書かれていると同時に、当時の欧米の心理学と英語教授法を論じており、個人的な経験だけではなく、学習理論に基づいて書かれたものである。高橋の数多くある著書の中から『最新英語教習法』を選んだのは、学習法について具体的な記述が多かったからである。

### 2 現代の外国語学習成功者との比較

高橋五郎が英語を学習した明治時代と現代では、学習環境は大いに異なる。明治時代は教科書や辞

書も十分に手に入らず、教師自身が十分な英語力を持っていなかった。リスニングの教材もなく、辞書の発音記号を頼りに学ぶような状況だった。それに比べ現在では、テープやCDはもとより英語の映画・テレビ番組が視聴可能である。英語の音声に接触する機会は、現代のほうが断然多い。

しかし、明治時代から現代を通して、共通する学習環境が一つある。それは、学校の授業以外では、自発的に行動しなければ英語に接触することはないということである。英語が話されている環境ならば、無意識のうちに英語が耳から入ってくるが、日本で暮らす限りそのような環境は意図的に作り出すか、限定された場所以外では、ありえない。それは昔も今も同様である。そのような環境の中で、過去と現在に共通して使用されている学習法があれば、それは日本人が効果的だと判断して選んだ学習法であり、日本人が好む学習法と言ってよいだろう。

そこでまず、『最新英語教習法』に書かれている学習法と現代の外国語学習成功者の学習法を比較し、過去と現在に共通する学習法を抽出する。現代の外国語学習成功者（以下、学習成功者）の学習法は、竹内（2003）のデータを利用した。竹内のデータは日本人で高い外国語能力を持つ169名の学習法についての書籍を分析し、その学習法を分類したものである。これらの学習成功者に共通することは、11-12歳以降に外国語の学習を始めたことと、留学経験が学習中期の段階まででないことである。高橋のデータは、まず『最新英語教習法』に書かれている学習法をすべて抽出した。次にそれらのデータを竹内の分類に適用し、竹内の項目との一致を調べた。

その結果、共通する学習法は、(1) 目標の設定、(2) 発音・韻律へのこだわり、(3) 記憶時の音声化と書記化、(4) 形式やルールの意識的学習、(5) 記憶の5つであった。以下、それぞれの項目について、その内容を比較する。

まず、「目標の設定」については、高橋は2箇所英語学習の目的を具体的に示している。

「英文を以て天下の形勢を学ばんと欲する也、英文を以て英米人の状態を知らんと欲する也、欧州古来の文学政法等を知らんと欲する也、シェークスピアの英を撫はんと欲する也、ミルトンの実を蒐めんと欲する也、思想を雄健にせんと欲する也、情念を高尚にせんと欲する也」  
(p.360)<sup>1</sup>

「外国語を学ばしむるは、小説稗史を読ましめん為にするに非ず、日常有用なる語辞文章を領解せしめんとするに在りとす」(p.310)

学習成功者もまた、動機づけが重要だと言っている。

「外国語を学習している動機を明確にすることである。」(p.142)

「明確な目標が強烈な動機となって、やる気をおこさせる。しかも、何段階にも小刻みに設定された目標の方がよい。」(p.143)

両者に共通しているのは、明確な目的を持つということである。高橋が言う英語学習の目的には、矛盾があるように見える。一方でシェークスピアを読むためと言い、他方では小説を読むためではなく日常語を理解するためだと言う。表現としては矛盾しているが、上記2ヶ所の記述がそれぞれ、教養面と実用面の両方の視座から述べられた目的であると解釈すれば、矛盾はない。

次に、「発音・韻律へのこだわり」に関しては、高橋は以下のように発音の重要性を強調している。

「最初より学生の耳と口とを正則的発音に馴致するを期すべき而也」(p.216)

「純然たる仮名文および羅馬字文は之に反して只耳のみ之に関与す、先ず其音声を聴き了るに非ざれば、何等觀念も浮かび出る能はず」(p.48)

「発音決してゆるがせにすべき者に非ず」(p.208)

一方学習成功者も、「まず音から入るべきである」という意見が多く、アクセント・リズム・イントネーションの重要性も挙げている。

「テープを聞き流さないで、真剣に何回も何回も『深く』聞く」(p.145)

「聞き取れないところをそのまま聞き流すのではなく、テキストで理解したうえで、何度も聞いたことで、効果があがったのでしょう」(p.145)

このように両者とも、正確な発音の重要性と聞き取る重要性を挙げている。高橋は、発音の具体的な練習法として、人が読む英語を聞くことと、辞書で発音記号を調べることだと言う。また、発音のバリエーション(アメリカ・イタリア・ドイツなど)を認める一方で、法則に則った正しい発音を学ぶ重要性を説いている。

第三の「記憶時の音声化と書記化」について、高橋は書いて覚えることと、発音して覚えることが大事だと言う。

「ABC二十六字母を配賦したる手帖またはnote-bookを二三冊備えおきて、字典に記入されざる如き長辞句、または文典に挿載されざる如き長用法を記載すべし、・・・其(斯く)此等を書写すること」(p.349)

「今日の所尤もアクセントを学生の心に銘刻せしむる良法は、亦是れ字書を引く時に必ず其時の発音とアクセントに併せて注目せしむるに在りとす」(p.213)

学習成功者も、音声だけでなく視覚を利用して記憶する方法をとっている。

「単語やイディオムを覚えるには、ノートに書き移しながら音読せよということです。」(p.157)

聴覚や視覚など、複数の感覚を利用することは、今も昔も有効であると学習者は感じている。高橋は、目・耳・手・口を効果的に使えば、会話力は自然に上達すると言う。

第四の「形式やルールの意識的学習」の項目において、高橋は文法の重要性を述べている。

「物言ふには文法を要するは火を睹るよりも明らかなり」(p.187)

「十三四歳以上は、読本の傍ら簡易なる文典を文典として授く可し」(p.264)

「中学校の生徒は既に小児に非ず、少年なり、故に第一年よりして、多少の文法を授くるを宜しとす」(p.240)

「抑も文典の第一目的は(スイトの説る如く)規則を習得せしめんとするに非ず、其国語の实地学修を助けんとするに在る者なれば…或る意味にては文典は猶消化を助くる副食物の如し…主食物と併せて之を用ひなば非常の功あらん…」(p.263)

「独学者は三冊の字典を開き破らざる可らず、二冊の文典を黒く赤く汚さざる可らず、其読む書に

は毎葉白紙を挿入する (interleave) を最も得策とす」 (p.349)

このように文法に関しては、多くの記述がある。学習成功者も、高橋と同様に文法は重要だと言っている。

「英文法ができるかどうか、致命的に重要なポイントであると思う」 (pp.160-161)

「頭で納得するということが、大人の学習者にとっては重要な要素なのである」 (p.160)

高橋も学習成功者も、子供と大人を区別しているという点で共通している。学習成功者は「大人の学習者にとっては」と言っているし、高橋は子供には文法は不要であるが、大人は理解してから記憶するので文法は有用であると言っている。

最後に、高橋と学習成功者の両者に最も多く共通するキーワードが、「記憶」である。高橋の『最新英語教習法』では、記憶に5つの章を割いており、多くの記述があるが、ここでは2箇所の言及を引用する。

「実に反復習熟即ち復習 (repetition and familiarity) が記憶及び暗記に必要なは、古人既に之を少なくとも二千年の昔に悟りぬ」 (p.146)

「実に反復 (repetition, Wiederholung) は記憶の一最大要件なる者とす、請う汝が学びたる所の者を幾度も繰かへせ、再三復読せよ、然らば如何に物おぼえ悪しき人も必ず終には記憶するに至らん、小児が事物をオボユルは全く此法則を自然に採用するに在りとす、素読百篇義自ずから通ずとの諺は茲に至りて意味ある者とならんとす」 (p.86)

「イジオムは各自適当なる文句中に於手之を斬々に記憶するを要す、唯辞典を窺ひたる而已にては決して記憶せらるる者に非ず、これを記憶するには連想 (association) または隣接 (contiguity) の力を借らざる可らず、例へば to do for なるイヂアムをオボエンには、・・・ They have done for me at last, Hardy! (彼奴等は頭倒オレをヤツツケヤガッタ) と、先づ此他動体を教え、然る後升が被動体を I am done for at last. を教ふべし・・・之を心理的教習法とす」 (pp.329-330)

このように高橋は、反復によって記憶力を強化することと、関連づけて暗記するという方法を推薦している。

竹内が分類した46の学数方略のうち、暗記に関連した方略は6項目あった。それらは、「基本文例の大量徹底暗記」、「文章の中での記憶」、「記憶時の音声化と書記化」、「リストを利用した記憶」、「関連語を一緒にして覚える」、「定期的な覚えなおし」である。以下は、そのコメントである。括弧内には、その記述が竹内のどの項目に分類されているかを記した。

「強い意欲と、単純でばかばかしいまでの暗記。この二つこそは、外国語を習得する上での必修の条件ではなかったらうか」 (「基本文例の大量徹底暗記」 p.150)

「暗記によりセンテンスパタンの引き出しをこしらえる。どの引き出しをいつ引っ張り出すかを、練習するのです」 (「基本文例の大量徹底暗記」 p.151)

「暗記による基礎力形成とその活用練習があつての創造力である」 (「基本文例の大量徹底暗記」 p.151)

「単語やイディオムを覚えるには、ノートに書き移しながら音読せよということです」 (「記憶時の

音声化と書記化」 p.157)

「紙に声をだしながら書きつければ、目と口と耳と手が英語を覚えるので有利である」(「記憶時の音声化と書記化」 p.157)

「単語を覚えるときには、同じグループの単語をいくつかいっしょにおぼえるのも悪くないと思います」(「関連語を一緒にして覚える」 p.157)

記憶については、第4章で詳述する。

以上、高橋五郎が提案した学習法と現代の学習成功者が実践した学習法の共通点を指摘した。これらは、第二言語習得ではなく、外国語学習という環境にある日本人が外国語を学ぶために有効であると感じた、自らの経験の共通点であると言える。中でも記憶・暗記についての記述が、双方に共通して多く見られることが分かった。

### 3 他文化圏との学習方略の比較

1970年代より学習ストラテジーの体系的な研究がなされるようになったが、その定義は多様である。オックスフォードは「学習ストラテジーとは、学習をより易しく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的にし、かつ新しい状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動である」と定義した(1994, pp.8-9)。学習者がとる行動はさまざまであるが、その中で特に外国語習得に貢献すると思われるものが方略である。方略は同時に複数使用することもあり、到達度によっても使う方略は変化する。つまり、学習方略とは、学習者が言語を習得するために自らに課す、意識的な行動、と本論では定義することにする。

上述したように、方略は同時に複数使用することもあり、到達度によっても使う方略は変化する。分類<sup>2</sup>により細分化されたストラテジーの中で、学習者がどの学習ストラテジーを選択するかは、さまざまな要因に左右されると言われる。その要因には、動機づけ、学習スタイル、性差、年齢、信条、文化的背景、学習環境、タスクの性格などが挙げられる(大学英語教育学会 2005)。その中の一つである文化的背景については、欧米文化圏とアジア文化圏との差異が報告されている。例えば、アジアは教師中心の傾向があり、その結果アジア人の特徴として、生徒は教師の意見を静かに聴き、それを受け入れ、教師の話を遮らず、決して反論しないという点を複数の研究が挙げている(Scarcella 1990)。

それ以外にも、欧米文化圏とアジア文化圏の差異が見られる方略に記憶がある。アジアでは記憶を重視する傾向にあると言われており、アジア人がより暗記を好むことに関しては、複数の先行研究がある(Scarcella 1990, Politzer & McGroarty 1985, Tinkham 1989)。Scarcella (1990) は、ベトナム、フィリピン、中国、台湾において暗記が重要視されていることを指摘する。Politzer & McGroarty (1985) は、アメリカの英語のクラスでヒスパニックとアジアの留学生を調査し、その行動の差異を指摘した。アジア系留学生は「友達を訂正する」「先生に質問をする」「自発的に取り組む」「援助を求める」「繰り返し言うことを求める」「確認する」などの点については消極的だった。これらの点は明らかに西欧の特徴であり、この結果はアジア系留学生が過去に母国で受けてきた言語教育を反映していると結論

づけた。アジア地域では、丸暗記、教科書の翻訳、リーディングにおける正確な文法の理解に重点が置かれており、上述のような教室内での言語活動は起こらないからである (Politzer & McGroarty 1985, pp. 113-114)。Tinkham (1989) は、アメリカの高校生と日本の高校生を比較調査し、日本人はアメリカ人より暗記に対して肯定的な受け止め方をしており、異なる言語を思い出す能力に優れ、その言語をより正確に認識できる、と結論づけた。

もちろん記憶はアジア人特有の学習法ではなく、多くの文化圏に共通する学習ストラテジーの一つである。記憶をストラテジーの一つとして分類したのは、オックスフォード (1994)、ルービン&トンプソン (1994) などである。まず、オックスフォード (1994) の分類を説明する。学習ストラテジーは直接ストラテジーと間接ストラテジーの二種に分類され、前者はさらに記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジーの三種類に分けられる。記憶ストラテジーは、知的連鎖を作る・イメージや音を結びつける、繰り返し練習する、動作に移す、の四つに分類できる。したがって外国語学習においては、言葉の配列と連想が学習者にとって意味のあるものでなければいけないと言っている。記憶ストラテジー使用に関しての研究結果は多様で、まれにしか使わないという研究もある一方で、広く使われているという結果もある。

ルービン&トンプソン (1994) も記憶術を使うことをストラテジーの一つとし、具体的に 9 項目の学習法を挙げている (pp.103-107)。

- 1 単語の終りの音が同じものをまとめて覚える
- 2 単語の初めの音またはアルファベットが同じものをまとめる
- 3 単語が意味しているものの特徴を利用する
- 4 機能で分ける
- 5 関連のある単語をまとめる
- 6 種類別に単語をひとまとめにする
- 7 同じ語幹をもつ語をまとめる
- 8 品詞別にまとめる
- 9 文脈と関連させる

記憶をストラテジーの一つとして複数の研究者が挙げているということは、このストラテジーが決してアジア人特有のものではないことを示している。しかし、1970年から1987年まで *Current Index to Journals in Education* に掲載された 347,096 の論文のうち、暗記に関する論文はわずか 35 本である (Tinkham 1989)。欧米の研究が暗記に関しては数が少ないことから、欧米では暗記に対する関心が低いことがわかる。

#### 4 高橋の記憶法

高橋の『最新英語教習法』は全 19 章 362 ページからなるが、そのうち記憶については 5 章 98 頁を割いていることから、記憶術について高橋が多くの書物を読み、記憶<sup>3</sup>を重視していたことが分かる。

『最新英語教習法』は記憶のメカニズムを説明するために、プラトン、ソクラテス、カント、ジョルジュ・サンポール、ボードウィンなど欧米の研究を引用している。高橋は、部屋の番号と事物を関連させる方法や、アルファベットを番号に置き換える方法について、人為的に記憶を強化することだとしている。そしてそれらを「記憶術」と呼び、「記憶に一生を費やすのは本末転倒」だとして、「記憶術は無効である」とさえ言っている。例えばリチャード・グレイはアルファベットに数字を当てはめることを提案した。以下の数字字母変換表がそれである。

a	e	i	o	u	au	oi	ei	ou	y
1	2	3	4	5	6	7	9	10	0
b	d	t	f	l	s	p	k	n	z

(p. 100)

アレキサンダー帝が紀元前 331 年に大帝国を建設した、ということを知るためには、「Alex331」の数字の部分アルファベットにし、Alexita (i は 3、t も 3、a は 1) と覚えるのである。一方、当時日本で流行していたのは、和田守記憶術である。例えば「京橋区」は「京童、橋北、区域」と覚える方法で、高橋はこの記憶法に対して、西洋の焼き直しの結合観念法であり、不自然だとする。

このように高橋は「記憶術」に対しては批判的であるが、記憶することは重要だと言う。高橋が提案する記憶力を高める方法は、以下の 6 つの点（反復と復習、連想、耳・目・手・口を使う、興味をもつ、文中で記憶する、理解してから記憶する）に要約することができる。それぞれについて、高橋の記述を記す。

#### (1) 反復と復習

「実に反覆 (repetition, Wiederholuing) は記憶の一最大要件なる者とす」 (p.86)

「抑も反復 (repetition, Wiederholuing) は (上にも説ける如く) 自然が人類に知識を興ふる最物の要件なること上に (第五六章中に) 詳説せし如くにして、亦是実に人為的記憶の最大要件なりとす」 (pp.145-146)

「実に反復習熟即ち復習 (repetition and familiarity) が記憶及び暗記に必要なは古人既に之を少なくとも二千年の昔に悟りぬ」 (p.146)

高橋は、反復練習によって記憶することが大切だとしている。反復学習の重要性は、当時の教育学者ラチヒ (Ratich) や過去の修辞学者クインクチリアン (Quintilian) などから引用して説明されている。

#### (2) 連想

「此記憶たるや物事を回憶するに連想 (association) てふ者の力を借ること亦尤も大なるを見る」 (p.87)

「唯辞典を窺ひたる而已にては決して記憶せらるる者に非ず、之を記憶するには連想 (association) または隣接 (contiguity) の力を借らざる可らず、例へば to do for なるイデアムをオ

ポエンには、…They have done for me at last, Hardy! (彼奴等は頭倒オレをヤツツケヤガッタ)と、先づ此他動体を教え、然る後升が被動体を I am done for at last. を教ふべし…之を心理的教習法とす」(pp.329-330)

関連する語法を、まとめて記憶することが有効だとする。高橋の言う連想と記憶術の違いは、以下の通りである。

「(一) 凡そ相隣接して同時に又は同所に起れる経験は相互に他を喚起す、コールドン將軍と云ふや必ず長髪賊を憶ひ出すが如く… (二) 相似たる物事は相喚起す、例へば不忍湖を見れば洞庭湖を憶ひ出し… (三) 相翻対したる物事は互に相憶出す、例へば明の暗に於る… (四) 相対し相待つ如き物事は互に相喚起す、例へば因の果に於る如く… (五) 相類比せる物事は互に相喚起す、例へば光が知識を暗示し、暗が蒙昧を喚起するが如く…」(pp.88-89)

つまり連想とは、ある事象を類似や対比によって関連付けをし、記憶を助けるものである。高橋の批判する記憶術は、数字を振るなどの機械的で不自然な暗記法である。それに対し、連想は意味をもたせた記憶法である。

### (3) 耳、目、手、口を使う

「先づ英語を世界語として理會するの力を養ふを要す、而して記憶法の原理に由て耳に、目に、手に、口に均しく交も訴たふるあらば、会話力も亦自然に発達せん而已」(p.199)

高橋は読むことだけを重視しているのではなく、耳・手・口を使用することを勧めている。その論拠は、人間の学びには視覚的、聞覚的、動唇的の3種類ある、という当時の生理学者による理論にある。

### (4) 興味をもつ

「勿論其凡て斯く教授する物には成る可く興味あらしめ、以て生徒の注意を惹き起すを期すべし、是れ記憶の最大要件なれば也」(p.269)

生徒が興味を持つことが、記憶を促進すると言っている。興味を感じればよく注意を惹き、よく注意すれば記憶力が増す、というのが高橋の理論である。

### (5) 文中で記憶する

「イジオムは各自適当なる文句中に於手之を斬々に記憶するを要す」(p.329)

説明して理解することが困難なイディオムは、単独で覚えるのではなく、格言などの文でそのイディオムを記憶することを勧めている。冠詞は、フレーズとしてまず暗記させて、その後折りに触れて理解させるべきだと言う。

### (6) 理解してから記憶する

「まず英語を世界語として理會するの力を養ふを要す、而して記憶法の原理に由て耳に、目に、手に、口に均しく交も訴たふるならば、会話力も亦自然に発達せん而已」(p.199)



「如何となれば外国語は殊に自ら理会して然る後尤も善く記憶せらるる者なれば也」(p.254)

「亦各前置詞の意義及び用法を事に触れ、機に臨みて、説明し、学生をして自然に其用法に習熟せしめんには、是亦合理的教誨法なり、斯く其意味を讀本上に再三再四指点せば、習熟せんこと疑なし、如何となれば既に其意味を明らかにして、又随つて之を繰返す、是れ心理的記憶法の常道なれば也」(pp.284-285)

「此の如く奇正交も或は理会により或いは暗記に由て精確にノミコミたらんには、其外国語は殆ど母語の壘を摩するに至らん」(p.293)

「児童は具体的に万事万件をまるのみ下す、成童以上の丁男は抽象的に一切を領解せずんば満足せざらんとす、是を以て小児に在りては無意味の事柄を記憶するに然のみ、困難なく大人に在りては有意的の事柄にあらざれば記憶するに苦しむ — 児童に於ては彼此関連せざる個々の文字をすらも数字をすらも容易に記憶し得べく、成丁に於ては意義の連結せる文句にして始めて記憶せらるべし、實に是れ自然の法則にして、…幾百千年来の経験の証明する所たる」(pp.132-133)

上述(5)のイディオムの場合には、まず暗記してから理解すると主張している。しかし高橋の理論は基本的に、まず理解してから暗記するということである。特に大人は理解してから記憶することが重要だと言い、大人と子どもの違いを繰り返し指摘している。

「(1) 反復と練習」、「(3) 耳、目、手、口を使う」、という方略からは、後の行動心理学を連想させる。確かに反復により学習するという原理は同じであるが、行動心理学と異なる点は、無意味な反復ではなく、意味のある練習というところにある。それは「(6) 理解してから記憶する」の項目に表れている。高橋は機械的な記憶法は不自然だとし、文法の理解も含めて、言語を理解することの重要性を強調している。高橋は当時の第二言語としての英語教授法にも通じていたが、それとは一線を画し、成人が外国語学習という環境において学習する方法を主張しているという点は、注目すべきことである。

比較文化的観点からアジア人の特徴だと言われる暗記重視と言うストラテジーは、高橋が明治時代に強調した学習法でもあった。そして、それは現代の日本人外国語学習成功者が使用する学習法でもあった。縦断的に過去と現在、そして横断的に日本と外国を比較することによって、双方に共通する日本人の外国語学習法として、暗記を挙げることができる。

## 終わりに

明治時代の英語学習者である高橋五郎の学習法と、現代の外国語学習成功者たちの間に共通した英語学習法が、いくつか抽出された。そしてその中の一つである記憶重視という戦略は、アジア人が好む学習戦略でもあり、高橋が最も紙数を割いて強調したこともあった。高橋五郎という一人の日本人が書いた書物をもとに一般的な結論を出すことはできないが、これらのことから、記憶を重視する学習法は日本人が好む学習法であると言えるかもしれない。

※この論文は日本英語教育史学会第23回全国大会の発表をもとに、加筆・修正したものである。

## [注]

注1：表記は原則として原文のまま表記したが、旧字体は新字体に変換した箇所もある。

注2：学習方略の分類法は、多岐に渡る。例えば、O'Malley & Chamot (1990) はメタ認知方略群、認知方略群、社会・感情方略群という3つの方略群に分類した。メタ認知方略群は学習に関する計画や評価を含む。認知方略群はインプットをどのように処理するかという方略で、練習、推測、演繹を含む。社会・感情方略群は他者との協力や感情コントロールを含む。Cohen (1998) は、言語学習方略と言語使用方略に分けた。言語学習方略はさらに以下の方略群に分けた。学習すべき対象を明確化して分類する範疇化方略群、学習すべき対象とできるだけ接する接触方略群、学習すべき題材を記憶する記憶方略群である。一方、言語使用方略も3つの方略群に分けられる。記憶した内容を検索するための検索方略群、運用にむけて練習するリハーサル方略群、情報の伝達を重視するコミュニケーション方略群である。

注3：記憶と暗記の相違について、高橋は次のように言っている。

「是の如く学習する言語をオボエテ忘れざるべく計る之を暗記す (memoriren, to commit to memory と曰ひ、何時にても迅速に起憶せらる可く自在にしようせらるべく練習する之を意思の記憶 (memory of will, Gedächtniss des Willens) と曰ふ)」(原文のまま、pp. 79-80) つまり、脳裏に刻み込むのが暗記で、暗記したものを自由に引き出せることが記憶と言える。

## 参考文献

- 大学英語教育学会（JACET）学習ストラテジー研究会（2005）『言語学習と学習ストラテジー  
自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ』 東京：リーベル出版
- 高橋五郎（1903）『最新英語教習法』 東京：東文館
- 竹内理（2003）『より良い外国語学習法を求めて —外国語学習成功者の研究』 東京：松柏社
- 飛田良文（1968）「高橋五郎と『漢英対照いろは辞典』」 『言語生活』 199、pp.84-95
- Cohen, Andrew D. (1998) “Strategies in Learning and Using a Second Language” London: Addison Wesley  
Longman Limited
- O’ Malley, Michael J. & Anna Uhl Chamot (1990) “Learning Strategies in Second Language Acquisition” New  
York: Cambridge University Press
- Oxford, Rebecca L. (1990) “Language learning strategies : what every teacher should know” Boston : Heinle &  
Heinle Publishers (穴戸通庸、伴紀子 訳 1994 『言語学習ストラテジー —外国語教師が知って  
おかなければならないこと』 東京：凡人社)
- Politzer, Robert L. & Mary Groaty (1985) “An Exploratory Study of Learning Behaviors and Their  
Relationship to Gains in Linguistic and Communicative Competence” TESOL Quarterly 19, pp.103-123
- Rubin, Joan & Irene Thompson. (1994) “How to be a more successful language learner : toward learner  
autonomy” Boston, Mass. : Heinle & Heinle Publishers (西嶋久雄 訳 1994 『外国語の上手な学び  
方』 東京：大修館)
- Scarcella, Robin (1990) “Teaching Language Minority Students in the Multicultural Classroom” New Jersey:  
Prencice-Hall
- Tinkham, Thomas (1989) “Rote Learning, Attitudes, and Abilities: A Comparison of Japanese and American  
Students” TESOL Quarterly 23, pp.695-698

# Learning Strategies for Japanese Learners of English

**Tada, Yoko**

Abstract

The aim of this paper is to ascertain the strategy that Japanese language learners employ. First, the language learning strategies of Japanese people who lived in the Meiji era and those of modern successful language learners are compared.

Takahashi Goro (1856-1935) is one of the translators and critics who lived in the Meiji era. He authored the book "Teaching and Learning English". The learning strategies suggested in his book and those of modern language learners are compared — memorization is one of the six strategies found to be in common.

Second, cross-cultural studies of language learning strategies were reviewed in order to specify the strategies that are peculiar to Japanese people. According to certain cross-cultural studies, classrooms in Asia are teacher-centered and textbooks are considered to contain important information. Consequently, some researchers conclude that Asian students are more fond of rote memorization as compared with students from Western cultures. In his book, Takahashi emphasizes the strategy of memorization above all other strategies.

Memorization is a strategy that is common to Takahashi and modern language learners, and it is characteristic to Asian language learners as well. These findings historically and cross-culturally suggest that the Japanese find memorization to be an effective strategy for learning English.